年報筑波社会学　第16号（2004），14～19頁.

《特集：「国際社会学」とは何か》

国際社会学の可能性

駒井　洋

1．国際社会学の提唱とその現在的意義

わたしは、1985年に「国際社会学のすすめ」というサブタイトルをもつ『地球社会のなかの日本』という書物を編集して有斐閣から出版いたしました[1]が、このサブタイトルを使うことについてはかなりのためらいがありました。この語の妥当性にかんしては、いまでも確信があるわけではありません。それでも、「国際社会学」という名称については現在ではいちおう学問的市民権が得られてきたようで、とてもうれしくぞんじます。

わたしは、ベルリンの壁が崩壊する直前の1989年に、『国際社会学研究』という単著を日本評論社からだしました[2]。そのさいにも、国際社会学というタイトルにある種の抵抗感があったことも事実です。国際というとその分析の単位は国家ということにならざるをえず、それは国家の絶対化につながる危険性があるというのがその理由です。この著作については、町村敬志先生に通読していただいてコメントを頂戴したのですが、先生からも地球社会を対象としているのに国際社会学というネーミングは妥当かという疑問が提示されました。ちなみにいいますと、イギリスで活躍しているロビン・コーエンという社会学者がおり、わたしはかれの『グローバル・ディアスポラ』を日本語訳しました[3]。かれの最近の著作に『グローバル・ソシオロジー』というよくできた教科書があります[4]。この書名を踏襲すれば、「グローバル社会学」という言いかたがあったかもしれません。

けれども、当時は学問の領域として確立している国際経済学や国際政治学の先例があることでもあり、もっとよいほかの表現もおもいつかなかったので、国際社会学でいくよりほかないと決意しました。そのころのことですが、国際社会学とわたしがいったときに、筑波大学の社会学の先輩の先生のなかになんとなく軽蔑的な笑いをうかべた方がおられて、情けなく感じたことをおもいだします。

わたしが国際社会学という領域に踏みこんだきっかけは、学問生活をはじめた1960年代なかばからのタイを中心とする東南アジアの研究にありました。それ以来アジアはずっとわたしのよりどころとなって、現在にいたっています。そのころの東南アジア研究はアメリカのコーネル大学の人びとが中心でしたが、その方法は文化相対主義の立場に立つ地域研究でした。文化相対主義とはなんであるかというと、それぞれの文化は他の文化と通約できない固有な価値をもっているとする文化的絶対性の主張と、それに由来してそれぞれ

の文化は本来的には変化することはないという文化的不動性の主張とに要約できるとおもいます。その結果、研究対象とされる各社会は、他の社会とは基本的に隔絶した独立した個体として分析されることとなります。

このような方法によって、コーネル一派の大多数は、とくに東南アジアの各社会の親族と村落の構造をあきらかにしようとしていました。日本の東南アジア研究の先駆者となった京都大学の東南アジアセンターもこの研究姿勢の強い影響のもとにあり、研究対象も似たようなものでした。ちなみにいえば、国際社会学と対照的に使われる「比較社会学」という用語も、文化相対主義の系譜に連なるとかんがえられます。というのは、各社会を比較するという作業は、比較される現象が絶対的かつ不動であることを前提としてはじめて可能となるからです。

わたしは、このような方法では、大きく変化しつつある東南アジアの現実を分析するにはまったく不十分であると痛感しておりました。さらに、親族と村落というミクロな部分に関心を寄せているという点にも大きな不満をいだいておりました。そのようなおり、1970年代にはいって、第三世界にかんして従属理論という新しいアプローチの影響力が高まってまいりました。これはネオ・マルクシズムの系列に属する理論で、パラダイム革新とも目されるものです。

従属理論は、アフリカをフィールドとするサミール・アミンとラテンアメリカをフィールドとするアンドレ・グンダー・フランクのふたりにより集大成されたものです。この理論は、国際的な連関のなかでそれぞれの地域の全体的構造と変動をとらえようとするものです。わたしは、この理論と接触して、その現実にたいする分析力の高さに驚嘆いたしました。筑波大学で若い人たちと一緒に「従属理論研究会」をつくって、一所懸命フォローしようとしたのもそのためです。1980年代にはいると、従属理論を基盤としながら、それをさらに発展させて地球社会全体の構造と変動をグローバルにとらえようとする世界システム論が急速に影響力を増大してきました。この理論はイマニュエル・ウォーラーステインにより提唱されたものですが、当時のわたしにとっては我が意を得たというおもいがいたしました。そこで、世界システム論を批判的に摂取しながら地球社会の構造と変動を全体的にとらえようとした試みが、さきほどのべました『国際社会学研究』でした。

このような国際社会学の立場から現在の日本の社会学のありかたをみますと、第一に、ヨーロッパやアメリカの議論をいちはやく輸入してそれを日本に紹介するという、明治維新以来の「輸入業者」がいまだに大手をふっていることが気になります。日本の社会学も、これまで積み重ねてきた100年以上の蓄積に立って、輸入ではなく日本で形成されたオリジナルな理論の世界的輸出をそろそろはかるべき時期が到来しているとおもいます。日本の社会学について第二に憂慮されるのは、ミクロ化がいちじるしいことです。それは、自我論なりアイデンティティ論にみられる「わたしへの引きこもり」と、「風俗評論」とわたしが呼んでいるような軽いジャンルの流行としてあらわれています。国際社会学は日本で

誕生したものであることは間違いなく、その意味で輸出可能性をもっています。またそのマクロ的な性格は、ミクロ化にたいする有効な解毒剤になることができるばかりでなく、グローバル化が進展している地球社会の将来を構想するために重要な役割を果たすことになるでしょう。

2．当時の国際社会学の構想と反省

『国際社会学研究』で提示したわたしの理論体系は、マルクスの提唱した社会構成体の概念を地球社会レベルで復活させようとしたものです。社会構成体を構成する要因としては、現在人類が直面している四つの大きな問題領域としての経済、支配、文化、エコロジーをとりあげました。そして、それらの相互関係にもとづく全体的動向を理論化しようとしました。

いまのわたしの眼からみますと、『国際社会学研究』は経済決定論的な色彩の強い世界システム論にひっぱられすぎて、地球社会の空間的構造についての把握が弱かったようにおもいます。現在のわたしの認識では、地球社会の空間構造は四層からなっており、第一の層はグローバルなもの、第二の層は東アジアとかヨーロッパとかの意味での大きな地域的単位、第三の層は国民国家と対応するような諸社会、そして第四の層は諸社会のなかの諸地域です。これからの国際社会学は、これら四つの層の相互依存関係とその変動過程を研究すべきです。

これと関連して、『国際社会学研究』は総体としての第三世界の分析に傾斜し、東アジアという地域的個性を軽視しすぎたようにおもえます。ここで東アジアとは、南アジアと西アジアにたいする概念で、せまい意味の東アジアと東南アジアをふくみ、北東アジアや中央アジアの一部もいれてよいかもしれません。地球社会全体にたいして東アジアがもつ独特の意味と運命をもっと検討すべきであったという反省があります。

3．アジア研究の脱オリエンタリズム化

現在アメリカの独善的な世界支配への野望を抑止するのに、欧州連合の存在が非常に大きな力となっていることはいうまでもありません。しかしながら、地球社会レベルでの暴力の蔓延を阻止するためには、欧州連合とならんで東アジア連合を形成することが急務であるとおもわれます。東アジア連合の形成にたいする最大の障害は、日本が戦争責任をいまだに明確化していないことにあります。日本は欧米列強に追随して、他国にたいする侵略をおこなったアジアで唯一の帝国主義国家でありました。この問題の解決は別途はかる

として、国際社会学のきわめて重要な課題は、東アジア連合の形成がいかにして可能となるかについての諸条件の解明にあります。

そのための第一歩は、アジア研究の脱オリエンタリズム化[5]にあります。いうまでもなく、ヨーロッパのアジア研究の基本的姿勢を「オリエンタリズム」であるとして、徹底的な批判をくわえたのがエドワード・サイードです。サイードは、おのれの優越性を確認しおのれの支配を確立するためにヨーロッパがつくりだしたアジアを劣等化する言説をオリエンタリズムと呼びました[6]。この批判の意義を認めるにしても、サイードの議論には、アジアのもつ積極的意義への問いかけが欠落しているという根本的な欠陥があります。そもそもオリエントとは、オクシデントでないという意味での残余概念ですが、オリエンタリズム批判も、批判にとどまるかぎり、このようなオクシデンタリズムの発想を継承しています。「脱オリエンタリズム」とは、アジアを残余概念ではなくオクシデントと異なる可能性を提示するものとして認識したいという意志の表明です。

オクシデントが達成した価値は、自由と平等という普遍的理想にあらわれていると主張されます。しかしながら、自由も平等もなにかの実質的価値を実現するための手段にほかならず、その意味で形式論理にすぎません。ところで、現在人類が目標としているものは、平和の実現や人権の尊重や地球環境の保持などですが、自由や平等などの形式論理では平和・人権・環境などを理念的に正当化することができません。ここにオクシデントの価値の限界があるようにおもわれます。ところで、西洋にたいしてアジアの理想を正面から掲げた思想家として、岡倉天心は高い評価に値します。たしかに天心の思想には天皇制を讃美したりする[7]時代的な限界があり、それゆえに大東亜共栄圏のイデオローグたちによって悪用されることにもなりました。それにしても、天心の絵画と同様に、天心のアジア論は理想主義とリリシズムの香りの高いアジア文化の本質を見ぬいています。

ここで天心にならって東アジアのつくりだした実質的価値を考えてみましょう。一言でいって、それは「寛容」という観念に集約できるとおもいます。寛容とは、他者の存在を容認するということであって、平和や人権のばあいには他の人間の存在の容認、地球環境では人類以外の他者の存在の容認を可能にします。オクシデントはエホバという神を信仰する一神教の文化の伝統のうえにありますから他の神を排除せざるをえず、結果的にここから寛容という観念が生まれるはずはありません。イスラーム世界のアッラーの神、ユダヤ教のヤハウェの神についても同様です。これら三つの絶対的神があい争うとき、この地上に血が流れるのは当然であります。

東アジアで寛容の観念が受けつがれてきたことには、仏教の「空」の思想がとくに深く関係しています。ブッダの悟りの中心には、苦からの解放のための「縁起」の認識がありました。縁起とは、すべての存在が相互依存関係においてのみあることを意味します。相互依存関係においてのみ存在するものには、絶対的な実体性がありません。このブッダの悟りを、哲学的に体系化したひとこそアジアの誇る大思想家ナーガールジュナにほかなり

ませんでした。かれは、その主著『中論』[8]において、縁起説を発展的に継承しながら、存在を「有」と「無」との相互関係において把握しようとする「空」の思想を理論化しました。

ところで、寛容の観念の思想的基盤は、空の理論ばかりでなく汎神論からも与えられるという反論が予想されます。ヨーロッパではスピノザの思想がこれにあたり、仏教のなかでは密教がこれに近く、日本の伝統的宗教もこのような色彩が強かったといわれます。すべての存在に神性あるいは仏性があるから、すべての存在は容認され、結果として寛容が成立するという議論は一見正しそうにみえますが、これはおのれをふくむすべての存在の絶対的肯定であり、結果的には「神々の争い」へと導かれざるをえなくなります。

天心の理想は「アジアはひとつ」という表現によくあらわれています。オクシデントがついに理念化できなかった「寛容」を観念的基盤とするとき、オクシデントと共存するばかりでなく、新しい地球社会の形成に積極的に貢献できる東アジア連合が現実化することになるでしょう。国際社会学は、このような精神的側面についての解明もおこなわなければなりません。

4．国際社会学の立場からの国際移民研究

最後に、現在の日本の国際移民研究についてのわたしの印象をもうしあげます。第一に、特定地域なり特定のエスニック集団だけに専念して、グローバル化という地球的レベルでの全体的脈絡への関連を不問にする研究の矮小化傾向があらわれてますが、わたしはこれには危惧を感じます。第二に、エージェントとしての外国人移民が、自分たちを取り巻いている環境とか社会構造とかにどのように働きかけ、それをハイブリッド化させもしくはクレオール化させているかという観点に立つ研究が総体的に少ないようにおもえます。この観点は、地球社会および東アジア社会のなかの日本を考えるとき、きわめて重要なものとなるでしょう。第三に、日本での滞在経験をもつ外国人移民たちが、帰国するなりあるいはヨーロッパやその他の地域に流出したあと、エージェントとしてどのように周囲に影響を与えているかについての研究がほとんど無いことが気になります。

要するに、外国人移民が、四つの層からなる地球社会をエージェントとしていかにクレオール化させているかという点についての問題意識が希薄であるようにおもわれます。しかしながら、外国人移民はかならずディアスポラという属性をもたざるをえないのですから、このような問題意識には決定的な重要性があります。

以上でわたしの話を終わります。ご静聴どうもありがとうございました。

〈注〉

(1) 竹中和郎・駒井洋編『地球社会のなかの日本』有斐閣、1985年

(2) 駒井洋『国際社会学研究』日本評論社、1989年

(3) ロビン・コーエン（駒井洋監訳・角谷多佳子訳）『グローバル・ディアスポラ』明石書店、2001年

(4) ロビン・コーエン、ポール・ケネディ（山之内靖監訳）『グローバル・ソシオロジー』平凡社、2003年

(5) この語については、駒井洋「はじめに」駒井洋編『脱オリエンタリズムとしての社会知』ミネルヴァ書房、1998年をみよ。なお、この編著は筑波大学大学院社会科学研究科に所属していた教員の共同研究である。

(6) エドワード・W.サイード（板垣雄三ほか監修・今沢紀子訳）『オリエンタリズム』平凡社、1986年

(7) たとえば、岡倉覚三（村岡博訳）『日本の目覚め』（岩波文庫）岩波書店、1940年をみよ。

(8) 三枝充悳訳『中論』（レグルス文庫）第三文明社、1984年

（こまい　ひろし／中京女子大学）